

## 東京大学 留学プログラム報告書 (プログラム名:2012 IARU Global Summer Program)

所属学部/研究科・学年(留学時):文学部 4年

留学先大学・参加コース: National University of Singapore, ASIA Now2: Sustainable Urbanism in Asia

コース期間: 2012年 6月 25日 ~ 2012年 7月 13日

卒業・修了後の就職希望先: 1.研究職 2.専門職(医師・法曹・会計士等) 3.公務員 4.非営利団体 **5.民間企業**  
6.起業 7.その他( )

### 1. 留学先大学の概要

シンガポール国立大学は、シンガポール国内随一の大学。

アジアの中でプレゼンスを発揮するために、カリキュラムの整備や設備投資を進めている。

留学生も多く、学生の国際交流も盛ん。

### 2. 留学の動機

自分自身、海外滞在経験がほとんどなかったことと、教育の分野を志す際に日本の教育を相対化して捉えるために、海外の学生がどうしているかや、海外の大学がどのような取り組みをしているのかについて、自分の目で確かめたいという思いが強くなったから。

### 3. 留学の準備

#### ①プログラムへの参加手続き(申請にあたってのアドバイスなど)

先方の担当者の指示通りに進めていけばよい。

メールでの対応も、すこし反応が遅かったが、質問したことは答えてくれるので、どんどん質問をするのがよいと思われる。

#### ②ビザの手続き(ビザの種類、申請先、手続きに要した時間、ビザ申請にあたってのアドバイスなど)

今回は、3週間の滞在だったのビザは必要なかった。

#### ③保険関係の準備(加入した海外旅行傷害保険・留学保険等)

インターネットでAIUの保険に加入した。

#### ④留学にあたって東京大学の所属学部・研究科で行った手続きなど(履修・単位・試験・論文提出等に関して)

所属するゼミについては、教官と相談の上、代替措置をとってもらった。

その他の授業に関しても、担当教官に相談の上、代替措置を撮ってもらえる場合はレポートを提出するなどの対策をとってもらった。もともとレポートで成績が評価される講義が多かったこともあり、多くの場合認めていただいた。

#### ⑤語学関係の準備(出発前の英語レベル・語学学習等)

2月にTOEFLテストを受講した。英語は、日常会話はなんとかできるという水準だった。

事前準備としては、単語を覚えたり、日常会話の表現を確認したりしていた。

#### ⑥日本から持参の方がよいもの、その他出発前にやっておくべきこと・アドバイスなど

基本的に、日本から持っていけるものは向こうでも購入が可能だった。

ただ、変圧器は持っていかないと電化製品を活用できないので注意。

とても暑いえ、部屋内での活用に便利なので、サンダルを持参するとよい。

また、部屋の中でインターネットを使うためには LAN ケーブルが必要なので、持参するとよい。

#### 4. 留学生活について

##### ①住居(住居の種類(寮・ホームステイ・ルームシェア等)、家賃、宿舎の様子、見つけた方法など)

大学側が手配してくれる大学内の施設に宿泊した。

個室で、テーブルとベッドとクローゼットがある部屋。

冷房こそついていないが快適だった。

建物の中に、ランドリー・キッチン・談話スペースなどがある。

##### ②生活環境(気候、大学周辺の様子、交通機関、食事、お金の管理方法(海外送金・クレジットカード)など)

気候は蒸し暑く、日本の8月のような気候となっている。

大学の隣にある UTown と呼ばれるエリアに居住する。

UTown の中には、カフェテリアやレストラン、自習スペース、コンビニ、スターバックスなどもはいついて、生活には不自由しない。ただ、食事などはあまり美味しくはないので、よく近くのフードコートに食べにいった。

また、バスで 10 分ほどで Clementi と呼ばれる比較的大きな駅にでられるので、そちらに足を伸ばすことも多かった。

交通機関は、基本的にはバスと地下鉄が中心。バスがどこに行くかや、どこで降りるかはなれるまでは難しいが、google にて、地下鉄やバスを含めた経路を調べることができるので、上手く活用するとよい。

また、タクシーも比較的安価なので活用するとよい。

食事は基本的に自分で食堂なので摂る形式になっている。周囲の美味しいフードコートにいったり、場合によってはレストランで食べたりすることが多い。また、フルーツをスーパーで買って食べたりしていた。

お金は、部屋の鍵付き引き出しに入れて管理していた。街の中にも両替所があるので、空港で一度、町中で一度日本円を換金した。あまり観光もしなかったなので、基本的には食費にお金を費やすことになった。

##### ③危機管理関係(留学先の治安、医療機関の事情、心身の健康管理で気をつけた点など)

シンガポールはとても治安がよい。

医療も体制が整っている。ただ、怪我(擦り傷)の処置を受けた友人はかなり高額(100ドル近く)の請求を受けていたので、保険等にかかっておいた方がよいと思われる。

##### ④留学に要した費用とその内訳(航空賃、授業料、教科書代、家賃、食費、交通費、娯楽費などの概算)

航空費

授業料・教科書代: 相手大学が負担

家賃: 200SGD=18000 円(20 晩)

食費: 400SGD ほど=36000 円

交通費: シンガポール国内に入ってから 40ドル。

娯楽費: 50ドルくらい(Ubin 島でサイクリング、カラオケ etc)

##### ⑤奨学金(受給していた場合は、支給機関・支給額など)

JASSO から 8 万円の支援を受けた。

⑥学習・研究以外の活動(スポーツ・文化活動、ボランティア・インターン、週末や長期休暇の過ごし方など)

大学内の施設を活用し、ジムやプールで身体を動かしていた。

また、週末は、同じプログラムのメンバーと、観光をしたり、勉強をしていた。

## 5. 学習・研究について

①履修した授業科目のリスト(そのうち、帰国後東京大学で単位認定の申請を行ったものに●をつけてください。)

ASIA Now2: Sustainable Urbanism in Asia

②留学中の学習・研究の概要(授業・予習・復習のスタイル、印象に残っている授業等)

担当教員によるレクチャーやゲストスピーカーの話を聞く座学のセッションと、実際にシンガポールの建造物や設備を見学しにいくセッションが交互におこなわれた。

特に、最新のビルを見学し、担当者によって説明を受けたセッションが印象的だった。

③学習・研究面でのアドバイス

日本における省エネルギー政策がどのように進んでいるのかについて調べておくといいかもかもしれないが、本プログラムは専門性が高くないので、それほど苦労はしないと思う。

むしろ担当が建築学科なので、日本の建築家について知識を少し入れておくと、教授や学生との話題になる

④語学面での苦労・アドバイス等

基本的には英語が母語の人たちなので、英語は使えて当たり前という環境の中で、議論を重ねていくことは慣れないと難しい。

また、シンガポール特有の英語の発音はなかなか理解が難しいので、慣れが必要。同様にインドの学生の英語もわかりにくいといった傾向もあるので、わからないところははっきりと聞き直したり、意味を確認したりする態度が求められる。

## 6. 留学先大学の環境について

①留学生へのサポート体制(語学面・学習面・生活面・精神面でのサポート等)

基本的には、仕組みとしてはない。

しかし、シンガポール国立大学の学生が、気にかけてくれた。(食事に誘ってくれるなど)

②大学の設備(図書館・スポーツ施設・食堂・PC環境等)

図書館、スポーツ施設(ジム・プール)は整備されている。

また、大学内に食堂(フードコート)が点在し、レストランも多くある。

PC環境としては、大学内には無線WIFIが飛び交っているので、

## 8. その他

### ①準備段階や留学中に役に立ったウェブサイト・出版物

シンガポールガイドブック。

### ②今後留学を考えている学生へのメッセージ・アドバイス

悩むなら、まずはいってみることをお勧めします。三週間の滞在かつ、すみやすいシンガポールという環境は、初めての海外留学にもってこいだと思います。少しでも海外の環境に身を置くことはとても貴重な経験になると思うので、ぜひ挑戦してみてください。

### ④その他東京大学のホームページ等に掲載可能な留学中の写真があれば添付してください。

## 2012 IARU Global Summer Program 学習成果に関するレポート

NUS (National University of Singapore) で開催された本サマープログラムは、自分にとって貴重な経験ができた。貴重な経験ができた理由は大きく二つあったと思う。

1 点目は、本プログラムが三週間にもわたるプログラムであり、時間が十分にあったことだ。時間が十分にあったことで、シンガポールという国に根をおろして生活ができ、参加者とも交流することができた。過去に国際交流プログラムに参加した経験はあったものの、過去に参加した国際交流プログラムは一週間程度のプログラムだったため、3週間にわたる交流と言うのは完全に初めての経験だった。三週間という期間があったことで、色々な場所を訪ねることができ、地元の人が食事をしているようなところで夕食をとったりするといった、時間にゆとりがないとできないこともできたので、単なる観光としての楽しみ方とは一線を画したシンガポールを味わい方が出来たと思う。同様に、メンバー同士の交流においても、じっくりと関係を構築してから交流することができたので、ただ仲良くなるだけではなく、お互いについてより深い理解をする機会に恵まれたと思う。そのような関係を構築するのは時間がかかることなので、このプログラムが三週間にわたるものだったことの価値は大きかった。

2 点目は、本プログラムが、IARU に加盟している大学から広範に学生が参加しており、それぞれの学生のバックグラウンドが非常に多様であったことだ。例えば、自分が参加したコースでは、学生の出身は、アメリカ・中国・オーストラリア・インド・デンマーク・スイス・シンガポールととても多様だった。そのうえ、それぞれの専攻も建築・メディア研究・都市研究・経済学・心理学・ソフトウェアエンジニアリング・人類学と多岐にわたっていた。このような参加者の多様性は、プログラムにおける議論を様々な角度から掘り下げることにつながっていたのみならず、バックグラウンドの違いから考えさせられる機会の多さにつながった。例えば、今回のコースの最終発表は、“Ecotopia”というテーマのもとに、環境に配慮した持続可能な社会をどのように実現するかについての提言を各自でポスターにまとめるというものだった。その際に、自分は「技術の問題ではなくて、人々の意識をどう変えるべきか」という点が重要だという視点からポスターを作成した。しかし、他のバックグラウンドを持つ学生はやはり着眼点が違っていた。例えば、シンガポール国立大学の建築学科の学生は、どのような設計をする事でエネルギー効率が良い建造物を造ることができるのかという視点でポスターを制作していた。デンマークで人類学を勉強していた学生は、水辺の景観がどのように変わってきたかを視覚的に示したうえで、人々の意識の変化をポスターにまとめていた。本プログラムでは、参加メンバー間での学問の違いもさ

ることながら、文化的なバックグラウンドの違いも合わさって、普段の学びではなかなか得られないような気づきに恵まれたと思う。

他大学の学生との交流を通し考えさせられたことが大きく二点ある。一点目は、外国の人と交流をする時は自分が日本を代表していると言う意識を持たなくてはならないということだ。彼らは、日本とはどういう国か、こういうとき日本人はどうするのか、日本ではどう考えているのか、といった質問をとっても多くされる。そして、そこでの自分の回答が、彼らにとって、日本や日本人についてのイメージを固めることになってしまう。そこで、自分が伝えることにしっかりと責任を持たなくてはいけない。しかし、責任を持って伝えるには自分が知っていることはあまりに少なく、もっともっと学んでいかなくてはならないということを感じた。

このような日本を代表しているという意識は期間中度々喚起された。それは、自分が留学した先がシンガポールということも大きかっただろう。シンガポールは気候も日本に似ている上、街のつくりは日本にどこか似ているところがあった。しかし、シンガポールは移民が多いという点や、国家が中心となった整然と進められた町並みは、どこか無機質で日本のそれとは違った匂いを放っていた。このように、シンガポールからは日本らしさ（というよりもアジアらしさ）は感じられるものの、決定的に日本との違いを感じさせる。この違いを言語化することが難しかったのだが、強く感じさせられる違和感は、自分が日本に根をおろした人間だということを強く意識させた。

また、もう一点印象に残ったのは、彼らの向学心の高さだ。シンガポール国立大学の学生たちは、今回のプログラムに参加しながらも、並行して自分たちの研究室の課題をこなすなど、とても熱心に勉強していた姿が印象に残っている。また、アメリカからの参加者は、シンガポールでのプログラムが終了した後、上海での別のプログラムに参加するために修了したその翌日の早朝に去っていった。デンマークからの参加者は中国語を含む5カ国語を駆使していた。そして、彼ら彼女らにとってはそのことが当たり前であり、とても意識の高さを感じさせられた。

上述のように、意識の高さを感じたからといって、参加していた学生と打ち解けにくかったわけではない。むしろ、自分と同じような若者であり、似たような感覚を共有していたことも新鮮な発見だった。例えば、シンガポールの学生と中国の学生は自分と似たようなアニメを見て育ったことがわかり、現在もマンガを読んでいることが判明し、そういったポピュラーカルチャーの話題で盛り上がった。また、アメリカとインドの学生とは一緒に動物園にいて、自分や中国の学生を尻目に盛り上がっていた。そして全員で行ったカラオケでは国籍など関係なく大盛り上がりしていた。一面では、非常に真面目な学生たちが、ある瞬間にはふとただの若者として無邪気にはしゃいでいる姿を目の当たりにして、自分と違う存在ではなくて、自分と同じような二十歳そこそこの学生であるということを感じた。

そのことは、自分ももっとやれるのではないかという思いにつながっている。今回の三週間の滞在は決して長いものとは言えないかもしれないが、自分にとっては最長の滞在経験であった。そのなかで、もっと長い期間でも海外に滞在できるという感覚も得ることができた。そして、自分と同世代の学生がとても向学心を高く取り組んでいることがとても刺激になる。たしかに、日本人が自分しかいない環境で過ごした期間はとても大変なものだったことは間違いない。しかし、自分が慣れ親しんだ環境を離れて、孤独と戦いながら自分の学びを深めていくことは、自らを鍛える上でとても大切なことなのではないかと強く感じた。そして、すぐにではなくとも、大学院に進学した後に、必ず長期間にわたって留学をすることを決意した。

今回のプログラムへの参加を通して、様々な気づきを得ることができただけでなく、多様なバックグラウンドを持つ学生との間で交流をすることの価値を感じることもできた。そして、これからの留学を

決意することができたことでとても有意義なものであった。このような機会をいただいて、とても感謝している。